特別講演 3

細菌学会の将来を考える：研究の軌跡と将来展望

細菌学会理事長・杏林大学医学部感染症学

○神谷　茂

日本医学会の分科会である日本細菌学会のルーツは、1927 年(昭和 2 年)に北里柴三郎先生（慶応大学医学部）が会長として開催された第 1 回衛生学微生物学寄生虫学聯合学会に求められる。1929 年、本聯合学会より衛生学会、寄生虫学会が分離・独立した後、日本聯合微生物学会と名称変更され、本学会が 1947 年まで続く。1947 年、第 20 回日本聯合微生物学会において、日本細菌学会への名称変更が決定され、1948 年、第 21 回日本細菌学会総会（名称変更後の第 1 回細菌学会総会である）が東京医科歯科大学（会長、寺田正中先生）にて開催された。1927 年から現在に至るまで本学会の学術研究活動は活発に行われ、北里柴三郎、志賀　潔、秦　佐八郎、小林六造、寺田正中、秋葉朝一郎、落合國太郎、梅澤濵夫、緒方富雄、二木謙三、藤野恒三郎先生などの偉大な先達が輩出した。2012 年 1 月現在、正会員 2117 名、学生会員 577 名を数え、2012 年 3 月第 85 回日本細菌学会総会（会長：平山壽哉先生）が長崎で開催され、85 年の長きにわたり我が国の細菌学研究の中心的学術団体となっている。

日本細菌学会には学会賞というべき浅川賞（ルーツは 1908 年の北里研究所における淺川博士奨学賞であり、1960 年から細菌学会浅川賞となる)、中堅研究者を対象とした小林六造賞（1994 年創設)、若手研究者の奨励賞である黒屋奨学賞（1964 年創設）の 3 賞がある。本学会員の学術研究について厳正かつ公平な評価が学術賞選考委員会により行われている。

この間の細菌学における技術の進歩は著しい。細菌培養法の確立から始まり、細菌毒素をはじめとする病原因子の精製･性状解析法､核酸化学の進歩に伴う分子遺伝学的技術､クローニング技術､southern/northern/western blotting 法、PCR 法、DNA microarray 法、proteome 解析法、metabolome 解析法などに結びついている。これらの時代の流れに沿った新技術を駆使して、細菌感染の病態解析、診断技術の向上、治療・予防への応用に関する研究成果が国際的に発信されてきた。

日本細菌学会では将来計画検討委員会を主体としてこれからの細菌学研究の将来を念頭においた対応を検討している。新たな研究スキルの会員による共有化、学際的領域研究の拡大、産業界との連携研究、若手育成ワークショップの拡充、米国・欧州およびアジア諸国との共同研究体制の強化などを念頭に本学会の更なる発展を目指している。本講演ではこれまでの細菌学領域における研究の軌跡を振り返るとともに、これからの細菌学の将来展望を考察したい。